

「掟に込められた神の思い」

(マタイによる福音書 5:21-24,27-30,33-37)

主イエスは「偽りの誓いを立ててはならない」と言います。「誓い」は、人々が互いに完全な信頼関係にあるときには必要ないものだからです。たとえば、「渋谷で5時に待ち合わせ」をするとき、お互いに信頼関係ができていれば、それだけで、約束は成立します。しかし、片方がいつも遅れてくる人だったらどうでしょう。そこに信頼関係がありませんから、約束してもらいたい側は、何らかの保証を差し出し、誓いを立てなければ約束をしてもらうことはできません。つまり、「誓い」が必要とされる人間関係には、すでに何らかの亀裂が生じているということです。この亀裂は、人間の口から出る言葉がいつでも誠実とは言えないからこそ起こるのです。また、誓う際に神を引き合いに出すなどということは、神を利用して結局は自分の思い通りにしたいと考えていることに他なりません。ゆえに、主イエスは「一切誓いを立ててはならない」と教えます。

主イエスがわたしたちを導こうとしているのは、もはや誓う必要のない、信頼に満ちた世界です。それは、「殺すな」「姦淫するな」という掟に込められた神の思いにわたしたちが立ち返るときに実現します。そこに込められた神の思いとは、相手のいのちも、自分のいのちも神にとってかけがえのない大切なものであること、そしてそれゆえに、わたしたちが互いのいのちを表面的ではなく、心から大切にしなさい、というものです。誓う必要のない世界とは、この心が互いの関係の基礎にあってこそ実現するのです。

十戒には「殺すな(出エジプト 20:13、申命記 5:18)」のみしか記されていませんが、昔の人々はこれに「人を殺した者は裁きを受ける」という解釈を加えました。さらに、この掟が適用される犯罪行為は、凶器を使った殺人とされました。このように、掟に限定を設けることで、人は容易に自分を正当化し、正しい者として保つことができるようになってしまいました。人の言葉が加えられるとき、その掟の心は置き去りにされてしまいました。それゆえ主イエスは、わたしたちが口にするのは「然り」と「否」のみで良いと言われます。「偽りの誓い」同様、人の口から出る言葉は、神と人との不誠実なものであることが往々にしてあるからです。人のいのちに無関心ではいられない神の思いをいただき、心から神と他者との誠実に生きることができるようになります。